

#

レ

イ

と

美

し

い



## キレイと美しい

---

高梨は迷っていた。女にすべてを打ち明けるべきか。

同棲を始めてもう三年になる。女は上野佳世といった。年齢は三十代半ば、アパート暮らしで独身、離婚歴がある。人付き合いが苦手で、休日はたいてい家のなかで映画を見て過ごしている。それらプロフィールの項目はすべて高梨にも当てはまる。

高梨は佳世といきつけの喫茶店で知り合った。毎朝顔を合わせる度に徐々に会話をするようになり、それから交際に発展し、一緒に暮らすまでの仲になった。

熱に浮かされていたせいか、高梨はすっかり忘れていた。自己紹介をする段で口にしたささいな嘘。それが今になって奥歯に留まったピーナッツの欠片のように存在を主張してきた。

やはり隠しごとはいけない。一切を打ち明けよう。そして、誠心誠意込めて求婚しよう。

ある日、高梨は佳世にひとつの提案をした。

一枚ずつ紙を用意して、そこにお互いの秘密を書く。なんでもいい、相手に伝えていなかった事柄をひとつ書く。それを折り畳んで交換する。それから互いに背を向けた格好で黙読する。

そして、その秘密の内容に耐えられなければ、部屋から出る。

「出るって、出てそのままいなくなるってこと？」

「……そうです」

「お互いの荷物もあるのに？」

たしかにそれもそうだ。やけに冷静な佳世に高梨は軽い苛立ちを覚えながら、

「じゃあ、立ち上がることにしましょう。我慢できないと思ったら……もし、もう恋人としてはいられないと思ったら、立つ。そうしましょう」

「なんだかなあ……」

佳世は含み笑いを浮かべながら、Tシャツを畳んでいる。高梨はその手をつかんだ。そして佳世に対して、初めて語気をつよめて言った。

「いいから、やってくれ」

気圧されたのか、しばらくして佳世は立ち上がるとスーパーの特売チラシを二枚と、百均のボールペンを持ってきた。無然としたまま元の位置に正座する。高梨に背を向けて。

狭いアパートの一室に静寂の時間が流れた。夕方五時、窓の外で下校中の小学生の声がする。

台風が過ぎ、もうじき夏が終わる。

書き終わるのは佳世が早かった。高梨は一度は書き終えたらしい素振りを見せたが、何かの気に食わなかったらしく、紙をあらためて書き直していた。佳世はやがてテレビを見始めた。それにも飽きると、リモコンの溝を指でなぞったり、そこにつまった埃を爪でこそいだりしていたが、台所やトイレに立つことはしなかった。

「そろそろ書き終わったか」

小一時間も経った頃、高梨が言った。自分だけが遅かったのだが、互いに背を向けていたから気づかなかったのだ。

「書いた」

「よし、じゃあ交換だ」

「……待つて。ちょっとおせんべい食べていい」

「駄目だ」

佳世は断られる事など百も承知、というような顔で大げさなため息をもらした。

高梨から見て右側、佳世の左側に折り畳まれたチラシがふたつ並ぶ。高梨の折り畳み方は三つ折りぐらいで雑だが、佳世の方は薬でも包まれているかのように端がきちっとしている。目にうるさい広告のデザインも、まるでそういう柄のように見えた。

佳世は一寸のためらいもなくひとつをすっと取り上げ、開いた。次いで高梨も紙を手を取ったが、相手の反応ばかりが気になって開く気になれず、洗剤が三百九十円だとか、二十一世紀梨が三個で二百五十円だとかいう文字を見てじっとしていた。

「上野佳世さま

私はこれまであなたに嘘をついてきました。

率直にいきますと、それは私の職業についてです。いつか話した、パチンコ屋の店員という、あれは嘘です。嘘というか、もう十年も前の話です。たまに口にしていた仕事の愚痴は、かつて働いていた頃の愚痴であって、あなたを欺くために話していたことでした。すいませんでした。

私の職業はデザイナーです。

フリーランスではなく、デザイン会社に所属しています。会社の事業は主にアートに関する企画製作を行っていて、簡単にいえば雑貨や玩具のデザインなどを請け負っています。従業員は私含めて十人程度。元はそれぞれ別のデザイン会社に勤めていたのですが、縁あって会社を立ち上げたのが三、四年ほど前でしょうか。仕事も稼ぎも多いとは言えませんが、どうにか今日までやってきました。

……誠にどうでもいい話です。そんなつまらない事柄を何故今日まで隠していたのかとお思いでしょう。私が本当に打ち明けたいのは、自分の職業についてではありません。私の製作してい

る商品のことです。

現在、収益の核となっているのはTシャツの売り上げです。

その大部分を占めるのが私の考案した「乳T」です。「ニューティー」と読みます。（これはもちろん、ユニクロの「UT」に因んでつけられたものです）

意味が分からなくて当然です。説明します。

Tシャツは大抵前面に文字やイラスト、写真などの写真がプリントされています。そこに、女性の胸の写真を貼付ける。ただの写真ではありません。きわめて実物に近い、いえ、実物よりも実物に見えるように肌の質感、量感、陰影を緻密に計算した写真です。また、その写真は長方形に切り取られてプリントされている訳ではなく、あたかも「Tシャツが破けて胸が露出した」かのような加工がなされています。布地が斜めに切り裂かれているような形になっていて、ほつれなどのディテールもしっかりしています。

（尚、乳首は出ていません。出ているものも販売はしたのですが、まったく売れませんでした。乳首はいわば個性ですから、それが露出してしまうと途端にそれは現実になってしまうのでしよう。「乳T」の乳は、あくまで誰の乳でもない乳でなければならなかったのです。）

いよいよ、なんの告白なんだとお思いでしょう。

けれど、私にとっては重大なことなのです。

私は、長年アートを志して生きてきました。

大学時代に岡本太郎の作品と出会ってから人生が変わりました。これだと思った。何の目的もなく、親の言われるがままに進学し、サークルだ合コンだとのんびり、モラトリアムを満喫していた自分にとって、生涯を賭して挑むべきものがやっと見つかったのです。大学を出て、親に無理を言って半分費用を出してもらい、芸術系の専門学校に入学しました。四つ下の同級生に混じってデッサンを一から学び、作品づくりに没頭したのです。バイト代はすべて画材に消えました。主な食事はスパゲティです。トマトソースの缶は買わず、塩とコショウで味付けして腹を膨らませていました。

どうしてあんなに頑張れたのだろうと、いまでも思います。

作品に没頭しているときだけは、自分を肯定できた。そんな気がします。そして行き着いたのが「乳T」です。どういうことでしょうか、私自身にもわかりません。

半ば自棄糞でした。私がそれまでにデザインしたプリントTシャツ、ペン立て、アンブレラ、すべてが空振りして事務所の一角には比喻ではなく在庫の山が出来ていました。

販売サイトのカスタマーレビューには〇〇のパクリ、模倣という文字が散見されました。

社内の評判はさらに辛辣でした。元々お互いの能力を知った上で集まった同志でつくりあげた会社ですから、手のうちは皆知っています。「やっぱり高梨はアートだから。Tシャツとかプロダクトデザインは無理」はっきりと言われました。

自信を失い、何をやっても間違っているように思えて仕方がない。どうにもこうにもならなくなった末に出したのが「乳T」でした。

先述したようにディテールにはこだわりました。そこはいち表現者としてのプライドで、どうせやるなら人の驚くような物を作ろうと、持てる技術は余すところなく注入しました。

ただ、それでも自分としてはあくまでジョークグッズのつもりでした。ヴィレッジ・ヴァンガードのパーティーグッズのコーナーにあるような。自分の名を世に知らしめるのは、これからの作品だと考えていました。

それがヒットしてしまった。何でもテレビに出てタレント活動もしているモデルが、自身の主催するファッションショーで着用していたとかで、一気に火がついたらしいです。

近頃はテレビ局からの取材依頼が相次いでいます。製作の行程を順に映して、何をつくっているのかをクイズ形式で紹介するそうです。昨日はアダルトビデオの製作会社から監督をしないかという話まで舞い込んできました。あんなものをつくるくらいだから相当なドスケベと踏んだのでしょう。

世間とはくだらないものです。

私が苦心惨憺の末に生み出した作品には見向きもしなかったくせに。

私はやがてアート、芸術なんて不確かなものを信じたのがそもそもの間違いとさえ考えるようになりました。

「なんだこれは、醜悪だ、と思うそれが美しいのであって。逆に、ああキレイだ、いいわねというのはただキレイであって。キレイと美しいのは正反対だ」

Tシャツの制作時、自分の慰めに用いていた太郎の言葉も、この頃になるともう響きませんでした。あのTシャツはどこまでも果てしなく、ただただ醜悪なだけです。その意味で、私自身をもっとも明確にあらわしている作品ともいえるかもしれませんが。

ほどなくして私はちょっとした有名人になりました。テレビ出演は当然断りましたが、代わりに社長がインタビューに答えました。そこでポロツと口にした「うちの高梨というデザイナーが」という言葉を、その番組は目敏く拾いあげたのです。元々バラエティ色の強い、クイズ自体で楽しませるといふより編集で笑わせるタイプの番組でしたから、そこで大々的に高梨光一という名前を、わざわざ履歴書の写真付きで取り上げ、「乳T」に至までの過去作を振り返るような映像を仕立てあげました。そこで……本当にいったいどうやって入手したのかと驚きましたが、専門学校時代に書いた裸婦像のスケッチまで引っ張りだして、「すでに乳Tシャツの片鱗が……？」などとテロップ表示するのです。

翌日には近所中の笑い者です。妻子に逃げられたのもそれが原因でした。

気持ちはわかります。私も私から逃げたかった。けれど街に出れば、あのTシャツを着て満足げに街を練り歩いている女子がうじゃうじゃいる。変わり者と見られたい男が着ている時もあった。

今思えば、私はあなたに逃げ込んだのでした。失礼を承知でいいますが、あなたは私の唯一の逃げ場だったのです。

あなたには、不思議と自分と似た空気を感取りました。

すみかを失った迷い猫のような眼差し。タバコを吸う瞬間に少しだけ震える唇は、世間にはもう疲れ果てたと語っているように思えてなりませんでした。……勝手な想像をして申し訳ありま

せん。けれど、あなたはきっと私と暮らしているこの場所さえ、安息の地とは思っていないの  
でしょう。

私はいつしかあなたを都合のいい偶像に仕立てあげて、信仰していたのかもしれませんが。け  
れど、救われたのは確かなのです。他に信じられるものなど、いまは何一つありません。

どうか、私と結婚してください。

あなたがこういった、「乳T」のような俗悪で性的なものに対して極めて潔癖なのは重々承知  
しています。つい先日も、あなたはテレビ番組のちょっとした下ネタに、下水道の工場見学に行  
った小学生のようにあからさまに顔をしかめていた。どうか私に幻滅しないでください。

今日会社を辞めてきました。貯金はありませんが、借金もありません。デザイン業界からは足  
を洗い、これまでとは違う仕事を一から始めようと思います。あても少しあります。仕事をしな  
がら、空いた時間に自分の描きたい絵を存分に描くつもりです。一日に一時間でいい、三十分で  
もいい、キャンバスに向かおうと思うのです。

承諾してくれるなら、そのまま立ち上がり、こちらを振り向いてください。

高梨光一」

佳世はその手紙を最後まで読み終え、元の通りに畳んだ。少しうつむいたり頭を上げたりを繰  
り返して、最後は真っ黒になったテレビ画面を見つめていた。高梨は沈黙に耐えきれず、

「……どうでしょうか」と呟いた。

その直後、空気がすうっと動く感じがした。

振り返ると、佳世は立ち上がっていた。蛍光灯の細いコードが彼女の右肩に乗っていた。表情は  
逆光になっていて読み取れない。

「それ、開いてください」

佳世は高梨の手元を指差した。そこには綺麗な正方形に畳まれたままのチラシが握られていた  
。高梨は言われるがままにそれを開いた。

彼女は立ち上がった。つまり結婚の申し出は断られたのだ。ここにきて冷蔵庫の上にあるせん  
べいを取るために立ち上がったという可能性はない。なんともまあ、あっけなかった。  
つまりは二人の関係も今日で終わりなのだから、そこに何が書かれていようともはやどうでも  
いい。とも思ったが、高梨はここで手紙を読まずにおく理由もさしてないことに気づいて、投げ  
やりな気分で紙を開いた。

チラシにはたった一行、小さなカタカナの文字が書かれていた。

「エネー、エーネッヤ……ダーヴァ……ニャッター？ なんですかこれ」

「私の、もうひとつの名前です」

高梨は気が動転して、つい愚問を發した。

「あなた、外国人だったんですか」

「いえ、違います。それはホーリーネーム」

そう言って佳世は紙に書かれた名前を、実に滑らかに発音してみせた。

高梨のなかで、火花のように小さく弾けるものがあった。いつか読んだ雑誌の端に、新聞の隅に彼女は居た。駅近くの交番の掲示板、そこにも居たに違いない。

この人の名前は、あともうひとつある。

「私は……だから結婚出来ません」

その時の彼女の顔を、高梨は今でもよく思い返す。休憩時間には中庭に出て、忘れないようにスケッチした。どれも中々うまくいかず、何度も紙をあらためた。

逮捕後にテレビで幾度となく報道された顔も、やはり自分の知る彼女とは一致しなかった。本気で笑うと、両目がきれいな山になって、口も嘘のようにV字になる、あの表情。せんべいを齧る時には妙に真剣な目つきになる。それが佳世だった。

いつか通常の生活に戻り、ふたたび絵を描ける環境が整った時には、まずその顔から描いてみようと思った。描き上げたその絵は果たして「美しい」のか。それは実際に描いてみなければわからない。

とにかく忘れないようにしよう、高梨は空を仰いでもう一度思った。